

多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム
派遣研究報告書

2010年9月30日

派遣者氏名（専門分野）	齊藤 茂雄（東洋史学）
-------------	-------------

下記のとおり報告します。

記

研究テーマ	内モンゴル陰山周辺の交通路について一杏雨書屋蔵「駅程記断簡」の検討から—
-------	--------------------------------------

派遣期間

2010年8月11日 ～ 2010年8月25日

	国	都市	訪問機関	受入研究者
訪問 研究 機関	中華人民共和国	呼和浩特市	内蒙古大学	呼格吉勒图 ^{ホグジルド} 副校長

派遣先で実施した研究内容

今回の海外派遣では、申請書にも明記したとおり、9世紀中葉に作成されたと考えられる新出の敦煌出土文書（羽032）に基づき、中国内蒙古自治区、陰山山脈周辺の交通路の復元を目指すことを大きな目的としていた。本文書は、ある旅行者の一日ごとの宿泊地が約1ヶ月にわたって記されており、それゆえ、現地を実際に移動することで路程を復元することが必須となる。そこで、派遣者は現地で内蒙古大学の呼格吉勒图副校長のご援助のもと、車をチャーターして実際の路程と思われるコースをたどった。ただ、当初の予定では1週間ほどかけて野外調査を行うはずであったが、内蒙古大学側の都合により、車をチャーターすることができたのがわずか2日間に限定されてしまったのは、遺憾の極みであった。しかし、それでもその2日間の間に予定コースの半分ほどの道のりを走破することができ、現地の景観を実見し、地形を確認することができた。また、遺跡としては、唐代の中受降城跡とされている包頭市敖陶窖子村北遺跡を調査することができた。予定していたそれ以外の遺跡には、今後機会があれば訪れることとしたい。

また、今回の海外派遣においては、現地研究者との交流を行えたことも大きな収穫であった。受入研究者である呼格吉勒图副校長はもちろんのこと、内蒙古大学の白玉冬講師や、内蒙古自治区文物考古研究所の陳永志所長・張紅星主任、包頭市文物管理处の張海斌主任など、多くの研究者と交流の機会を持つことができた。現地の研究者と交流を行うことで、学術的な知見を得ることができただけでなく、今後、現地調査を行う機会があった際の便宜という点でも、大変有意義であった。

加えて、申請時には全く想定していなかったことであるが、同時期に呼和浩特入りをしていた大阪大学の荒川正晴教授の便宜により、内蒙古自治区のカラホト出土文書の実見を行えたことは望外の喜びであり、派遣者の研究の幅を広げるという点で意味深い時間であった。カラホト出土文書は、主に13～14世紀のモンゴル時代の公文書からなる出土文書群であり、モンゴル時代に実際に利用された文書が出土する例がほとんどないことから、極めて貴重な存在である。派遣者は、出土文書自体ほとんど実見する機会を得たことがなく、ましてモンゴル時代のものは初めて実見したことも

裏面に続く

あって、その紙質、紙の大きさ、文字の形など、実見しなければ分からない特徴を学ぶことができた。また、同時に荒川先生の科研参加者と交流の機会を持つこともできた。国内の一流の研究者との交流の場は、大変有意義なものであった。

研究の当初の目的・計画の達成状況、明らかにできた成果

上述したとおり、今回の海外派遣においては内蒙古大学側の都合により、野外調査を実行できたのが2日間に限られることとなった。それゆえ、当初予定していた遺跡のほとんどは調査することがかなわず、敖陶窖子村北遺跡のみを調査することができた。また、車で景観調査を行うはずの予定の路程も、半分ほどしか走破できなかった。しかし、それでも、唐代の防御施設である中受降城の立地及び、城郭の規模を確認することができ、歴史復元の好材料をえることができた。その上、当遺跡は包頭市の新興開発地域に面しているため、破壊の危機を蒙っていた。今後、再び当遺跡を訪れることが可能かどうか分からず、破壊されない内に当遺跡を実見することができたのは、幸運であったと言える。加えて、実際に経路を走破することによって、唐代の交通路として派遣者が出発前に想定していた山越えの経路が、実際には通好困難なほど険しい道のりであることが判明し、今後の交通路復元作業に大きな利益となった。

今回の海外派遣は、調査量としては予定したものよりもかなり少ないものとなってしまったが、質は極めて高いものとなった。今後の唐代交通路の復元に、大きな意味のある調査となったと考えている。

派遣後の研究発表の予定

今回の調査により、新出の敦煌文書である羽 032 文書を用いて唐代の陰山山脈周辺の交通路を復元することが十分可能となった。そこで、まずは日本国内において『東洋学報』や『内陸アジア言語の研究』などの査読誌に研究を発表した後に、中国の査読雑誌である『中国边疆史地研究』や『歴史地理』などの歴史地理分野を主に扱う雑誌に、3年以内の投稿を目指したいと思う。